認知症高齢者の「その人らしさ」に基づく施設個室環境の概念化

CONCEPTUALIZING THE ENVIRONMENT OF PRIVATE ROOM BASED ON "PERSONHOOD" OF ELDERLY WITH DEMENTIA IN GROUP CARE UNIT

赤木 徹也*, 鯉坂 誠之**
Tetsuya AKAGI and Shigeyuki AJISAKA

The purpose of this study is to clarify conceptualizing the environment of private room based on "Personhood" of elderly with dementia in group care unit and relations between it and dwelling consciousness. The results are summarized as follows. The conceptual model of the environment of private room based on personhood of the elderly with dementia is structured by eight aspect including personalization. The elderly with dementia who think one's final residence has strong consciousness for personalization in conceptual model. In the elderly with dementia based on the recognition of the final residence, it is important that it promotes continuity and autonomy while maintaining personalization and secures social relationship and stability. On the other hand, in the elderly with dementia based on the recognition of the temporary residence, the private properties are not suddenly carried, and it is important to change their recognition little by little.

Keywords: Personhood, Conceptualization, Elderly with dementia, Living environment, Private room

その人らしさ, 概念化, 認知症高齢者, 住環境, 個室

1. はじめに

認知症高齢者の住環境における QOL 向上には、個別ケアの充実やプライバシーの保護、さらには自立性の援助や安全・安心の確保など多様な要因が指摘されているが、その中でもとくに重要な項目のひとつとして、生活の継続性が挙げられている^{注1)}。その生活の継続性を成立させるためには、物理的環境のみならず人との関わりを表す社会的環境、ケアや施設の運営などを表す運営的環境を複合的に捉える必要がある。また、生活の継続性は環境への適応能力が低下している認知症高齢者にとって、急激な環境移行を回避させるのみに止まらず、残存能力の維持や向上にもつながる重要な役割を担うものと考えられている。そのため、生活の継続性は認知症高齢者に対する多くの住環境評価尺度のひとつとして用いられている。そして、生活の継続性を評価するための下位次元には、家庭的な環境の必要性が述べられている。つまり、施設環境においてより家庭的な環境を創造することが、生活の継続性を高める重要な要因のひとつであるとされているのである。家庭的な環境は認知症高齢者の環境への適応を支援する大きな効果があること¹⁾や、認知症高齢者の精神状態の安定に寄与し、治癒的な効果をもたらす可能性があること²⁾などが指摘されている。

認知症高齢者の施設環境整備に目を向けると、そこでは主に共用空間と個室が挙げられており、共用空間では「家庭らしさ」、個室では「その人らしさ」に基づく家庭的な環境整備が重要^{3),4)}とされている。個室環境における「その人らしさ」とは従来、家族の写真な

どの個人的な意味を持つ物品によりアイデンティティ (identity) を高めるといったパーソナリゼーション (personalization) という捉え方がされてきた⁵⁾。

一方、パーソン・センタード・ケアといった理念が提唱されており、認知症高齢者のその人らしさを「人として認めること、尊重、信頼」といった位置付けを中心に据えたパーソンフッド (personhood) という視点で捉える場合もある⁶⁾。パーソンフッドでは、その人の内面を反映するために、従来のパーソナリゼーションにおけるアイデンティティのみならず、くつろぎや愛着、社会的一体性、主体的行動などをも捉えることが重要とされている^{注2)}。

認知症高齢者のその人らしさをパーソンフッドと捉える研究は、看護や介護の分野において先進的な取組みが散見される^{7)~9)}。ここでは、パーソン・センタード・ケアを目指した評価手法を用いてその影響を明らかにする取組み⁷⁾や、入居者の生活時間を客観的に観察することで認知症高齢者の内面に近づこうとする試み⁸⁾がなされている。しかしながら、認知症高齢者の個室環境に着目し、「その人らしさ」を内面から捉えようとする取組みはほとんど行われておらず、個室環境に関しては家族や施設職員に対してヒアリングを試みるといった間接的な手法が採用されている状況にある¹⁰⁾。

人の認識を直接的に抽出する手法については、発話から意味を捉え、概念化を図るといった取組み^{11),12)}が行われているものの、それを認知症高齢者に応用し、認識の違いに応じて施設個室環境の整備に結び付けるといった研究は未だ十分に行われているとは言い難い。

* 工学院大学建築学部建築デザイン学科 准教授・博士(工学)

** 大阪府立大学工業高等専門学校総合工学システム学科
講師・博士(工学)

Assoc. Prof., Dept. of Architectural Design, School of Architecture, Kogakuin Univ., Dr. Eng.
Lecturer, Dept. of Technological Systems, Osaka Prefecture University College of Technology, Dr. Eng.

本研究の目的は、その人らしさをパーソンフッドとして捉え、認知症高齢者から個室環境の認識に関わる発話を抽出し、その人らしい施設個室環境の概念化を図るとともに、住処としての認識の差異が概念や設え方に与える要因を明らかにすることである。

2. 調査概要

2-1. 調査対象施設と個室の特徴

調査対象施設は個人を尊重したケアを志向し、ユニットケアを実践している特別養護老人ホーム 1 施設（特養）とグループホーム 3 施設（GH1～GH3）の計 4 施設である。個室の特徴は、①個室化されている事、②物の持ち込みが自由な事、③ベッドとクローゼットが備え付けてある 1 施設（GH3）以外は基本的にベッドのみが備え付けてあり、その他の物品に関しては入居者に持ち込みを働きかけている事である。

2-2. 調査対象となる入居者の選定

表 1 は調査対象となる入居者の属性と施設概要を示す。調査対象となる入居者は施設の個室を利用しており、施設長並びに本人と家族からの了解が得られた認知症高齢者^{注 3)}の内、調査が遂行できた 19 名（男性 3 名、女性 16 名、平均年齢 81.4 歳）である^{注 4)}。入居者の選定理由は、①調査者との会話が可能である事、②内容が大きく変化することなく首尾一貫した会話が可能であること、③移動などの日常生活がある程度自立している事、④自身で個室の設えが可能である事、である。なお、入居者は基本的に同一地域内、又は近隣地域から入居しており、入居前・後における立地条件が極端に変化していないことを確認している。

2-3. 調査手順

実施期間は 2011 年 10 月から 2012 年 1 月迄である。調査は認知症高齢者のその人らしさに基づく施設個室環境を明らかにするため、次の 3 段階の手順で構成される。

(1) 事前調査

事前調査では、入居者の会話内容をより深く理解するため、施設の職員から入居者の趣味嗜好、職業・生活歴、移動能力、家族構成などを抽出する。

(2) ヒアリング調査

ヒアリング調査は、入居者から個室環境におけるその人らしさを導き出すため、各入居者の個室内で自由な発話を促す会話形式による聞き取りを実施する。その際、認知症高齢者が個室を自身の環境としてどのように受け止めているかを明らかにするため、以下の教示を行う。「あなたが暮らしているこの部屋を私に紹介してください。あなたが部屋で感じている事、あなたの部屋における生活、あなたの部屋に置かれている物など、紹介したい事柄はなんでも結構です。」その後、発話が途切れた場合にはその度に同じ教示内容を最初から繰り返し、答えが得られなくなった時点で調査を終了する。なお、入居者との会話をスムーズに行うため、ヒアリング調査に際して 15 分程度の自己紹介や世間話を踏まえた雑談の時間を設ける。

(3) 物品調査

物品調査では、入居者の個室内に存在する物理的環境を目視と写真撮影により調査する。ヒアリング調査により得られた発話の中から「物品」に関わる内容を抽出できるよう、個室における物品の種類や数、ならびに設置場所などを紙面上に記録する。

表 1 入居者の属性と施設概要

入居者	性別	年齢	認知症の程度	日常生活自立度	要介護度	入居期間(月)	趣味・嗜好等	職業・生活歴等	移動能力	(各人数)家族構成	入居前居住形態	入居前の居住地	施設形態と立地	施設概要
S1	男	59	I	J2	2	1年7ヶ月	車・塗り絵 文字を書く	-	車椅子 自立	父・母 姉(2)	老健	神奈川県 K市	特別養護 老人ホーム (特養) 神奈川県 K市	入居者数：100 名（ユニット型個室は 30 名） ユニット数：3 ユニット、ユニット毎の入居者定員：10 名 各ユニットに関わるスタッフ数：常勤時間帯 2 ～ 3 名、 夜間・深夜時間帯 2 名 /3 ユニット 備え付けられている物品：ベッドのみ 交換・貸出が可能な物品：エアコン、カーテン、タンス 個室面積：14.2 ㎡（S1 ～ S6）
S2	女	61	I	A1	1	1年6ヶ月	踊り・絵描き 塗り絵・歌	販売員	独歩	姉	GH	神奈川県 K市		
S3	男	89	IIIa	A2	2	1年	カラオケ テレビ鑑賞	公務員	杖歩行	妻 息子(3)	自宅	神奈川県 K市		
S4	女	83	IIIb	A2	2	1年5ヶ月	-	専業主婦	独歩	息子 娘(2)	自宅	神奈川県 K市		
S5	女	89	IIa	B1	2	1年6ヶ月	体操・写経 スケート	専業主婦	手押し車	娘(2)	老健	神奈川県 K市		
S6	女	87	IIIb	A1	5	1年7ヶ月	歌・踊り	専業主婦	独歩	夫 息子	自宅	神奈川県 K市		
S7	男	81	IIIa	A1	3	3ヶ月	旅行	自営業	独歩	妻・娘 息子	自宅	東京都 S区	グループ ホーム (GH1) 東京都 S区	入居者数：18 名、ユニット数：2 ユニット、ユニット毎の入居者定員：9 名 各ユニットに関わるスタッフ数：常勤時間帯 2 ～ 3 名、夜間・深夜時間帯 1 名 備え付けられている物品：ベッドのみ 交換・貸出が可能な物品：エアコン、カーテン、洋服掛け、テレビ、 アームチェア、タンス 個室面積：10.3 ㎡（S7、S10）、9.9 ㎡（S8、S9）
S8	女	77	IIa	A1	3	5ヶ月	手芸	専業主婦	独歩	息子(2)	自宅	東京都 S区		
S9	女	87	IIa	A2	3	1年5ヶ月	テレビ鑑賞	専業主婦	独歩	なし	自宅	東京都 M区		
S10	女	86	IIa	A2	3	1年8ヶ月	百人一首 歌・洋服	専業主婦	杖歩行	娘	自宅	東京都 S区		
S11	女	83	I	J1	1	3年6ヶ月	服 文字を書く	会社員 美容師	独歩	娘 娘の夫	自宅	神奈川県 K市	グループ ホーム (GH2) 神奈川県 K市	入居者数：18 名、ユニット数：2 ユニット、ユニット毎の入居者定員：9 名 各ユニットに関わるスタッフ数：常勤時間帯 2 ～ 3 名、夜間・深夜時間帯 1 名 備え付けられている物品：ベッドのみ 交換・貸出が可能な物品：エアコン、カーテン 個室面積：10.1 ㎡（S11、S12、S14、S16）、10.4 ㎡（S13、S15）
S12	女	89	IIb	A2	2	4年3ヶ月	歌を歌う	専業主婦	独歩	息子	自宅	神奈川県 K市		
S13	女	88	IIa	A2	1	1年5ヶ月	ダンス テレビ鑑賞	専業主婦	独歩	弟	自宅	神奈川県 K市		
S14	女	76	IIa	A1	2	1年2ヶ月	園芸・写真鑑 賞・スポーツ	販売員	独歩	兄の妻	自宅	神奈川県 K市		
S15	女	88	IIIb	B2	4	1年2ヶ月	写経・詩吟	会社員	車椅子 自立	娘	自宅	神奈川県 K市		
S16	女	88	I	J1	1	1ヶ月	歌	専業主婦	独歩	息子(2) 娘	自宅	神奈川県 K市		
S17	女	71	IIIa	A1	2	1年5ヶ月	音楽・絵画	ピアノ講師 専業主婦	独歩	夫・娘	自宅	東京都 B区	グループ ホーム (GH3) 東京都 B区	入居者数：27 名、ユニット数：3 ユニット、ユニット毎の入居者定員：9 名 各ユニットに関わるスタッフ数：常勤時間帯 2 ～ 3 名、夜間・深夜時間帯 1 名 備え付けられている物品：ベッド、クローゼット（建具収納） 交換・貸出が可能な物品：エアコン、洋服掛け、スツール、タンス 個室面積：9.3 ㎡（S17、S18）、11.3 ㎡（S19）
S18	女	85	IIIa	A1	2	3年	社交ダンス 旅行	会社員	杖歩行	弟	自宅	東京都 B区		
S19	女	80	IIb	A1	1	3年6ヶ月	-	専業主婦	杖歩行	息子	自宅	東京都 B区		

注 1) 認知症の程度は「認知症高齢者の日常生活自立度判定基準」を、日常生活自立度は「障害高齢者の日常生活自立度」を用いる。

注 2) 「備え付けられている物品」とはベッドやクローゼット（建具収納）のように施設に備え付けられている物品を、「交換・貸出が可能な物品」とは入居者の要望に応じて持込みの物品との交換や、施設からの貸出が可能な物品を意味する。

2-4. 分析手法

表2はヒアリング調査より得られた発話数の内訳を、表3は発話内容に基づく分析シートの一例を示す。発話の分析では質的研究において広く採用されている定性的な手法であるM-GTA法（修正版グラウンデッド・アプローチ）を応用した分析を用いる¹³⁾。従来のM-GTA法は、発話より得られた内容を逐語化し、意味を解釈して理論的飽和化^{注5)}を迎えるまで「概念」を生成する点に特徴がある。具体例として示される内容が発話より得られる単位文として抽出され、複数の入居者が同様の発話をしている場合には、それらの単位文が分析シートにまとめられる。これら単位文をまとめた内容が定義として規定され、その定義に基づき生成されるのが概念である。また、従来のM-GTA法では概念間の相互関係を「類似」「対極」という2つの作用により検討しているが、本研究ではより詳細に相互関係を見るため、この点を応用し「類似」「対極」「展開」「重複」という4つの作用に分けて検討を行う。なお、「類似」とは似ている概念の関係を、「対極」とは対になる概念の関係を、「展開」とは1つの概念から内容が広がる関係を、「重複」とは2つ以上の概念を併せ持つ関係を示す^{14), 15)}。

3. 調査結果と考察

3-1. その人らしさに基づく施設個室環境の概念モデル

図1は認知症高齢者のその人らしさに基づく施設個室環境の概念モデルを示す。分析では、発話により得られた概念が理論的飽和化を迎えるまで生成を行った。その結果、47概念が生成された。続い

表2 発話数の内訳

[発話数]										
	S1	S2	S3	S4	S5	S6	S7	S8	S9	S10
発話数	38	81	55	116	54	10	34	48	61	71
住処の認識	—	終	—	仮	—	—	—	—	仮	仮

	S11	S12	S13	S14	S15	S16	S17	S18	S19	計
発話数	23	4	22	30	149	27	25	79	103	1030
住処の認識	—	—	—	—	終	—	仮	終	終	—

＜凡例＞終:「終の住処」の認識、仮:「仮の住処」の認識

表3 発話分析シートの一例

＜概念(2)の例＞		[入居者:S4, S5, S10, S15, S17]
概念	(2)個人的な活動をしやすい居場所	
定義	テレビや趣味作業などの個人的な活動がしやすい居場所を自身で選択できること	
具体例	<ul style="list-style-type: none">・ベッドは、座って何かをしたり、テレビ見たりするのにちょうどいいですよ。[S4-168]・ここ（椅子）とかよりも、こっちの・・・ベッドの方がね、座りやすいんです。[S4-169]・私はもう夜になるとベッドに入って、テレビを見るの、ふふふ。[S5-023]・ここ（ベッドの上）でこうして窓の外を見ながらお日様が出るのを眺めています。[S10-030]・もうここ（ベッド）で、こっち（窓側）を頭にして寝ているものですから、もう本当に朝早く、向こうからお日様が出てくるのが見えるの。[S10-189]・えー、ここの所（ベッドの横）でこうやって写経を書いたり、寝ながら書けないから、椅子をつかったり、あとはこっち（飾り棚の上）で書いたりね。[S15-398]・ベッドで寝転がって見るってこと、お行儀よくしなくてもいいのよね。[S17-018]	
理論的メモ	<ul style="list-style-type: none">・テレビを見たり、趣味の活動を行ったりといった個人的な活動を行う際に最適な居場所を自身の意志で選択している概念である。・S15は写経という活動に対して、様々な居場所を状況で使い分けている。・テレビや窓の外を眺めるなど作業を伴わない活動に関してはベッドの上が居場所となることが多い。	

注)具体例の文末に示される[]は入居者ごとの発話の通し番号を示す。

て概念間の相互関係を捉えている。この手続きにより、各概念はその上位概念であるカテゴリに収束され、さらに上位概念であるコアカテゴリへと収束される。その結果、47概念は21カテゴリに収束され、さらに8コアカテゴリ【Ⅰ. 個人的なこだわり】【Ⅱ. 生活の継続性】【Ⅲ. 人や物との繋がり】【Ⅳ. 職員による生活支援】【Ⅴ. 自律しうる日常生活】【Ⅵ. 住空間としての快適性】【Ⅶ. 安定した個の居場所】【Ⅷ. 個室外の空間との連続性】に収束される概念モデルとして示された^{注6)}。このうち【Ⅰ】～【Ⅲ】は従来のパーソナリゼーションといった視点から、【Ⅰ】～【Ⅷ】は本研究で位置付けているその人らしさ、すなわちパーソンフッドといった視点から捉えられている。8コアカテゴリの詳細と相互関係は以下のように整理される。

【Ⅰ. 個人的なこだわり】：自身にとって意味のあるお気に入りの居場所、趣味嗜好に合わせた個人的な活動、自身の成果を表す物やお気に入りの物など、個室環境における個人的なこだわりに関する概念である。これは居心地の良い場所を得ている場合やお気に入りの物に愛着を感じたり、趣味や作業を通じた自己表現の際に得られる個人的な満足感などがこだわりを生み出しているものと考えられる。具体的には、座り心地の良いベッドの上をお気に入りの場所としており椅子やソファには座らない事や、趣味で毎日描いている絵をその成果として個室の壁に展示している事などが挙げられる。

【Ⅱ. 生活の継続性】：入居前の生活から行っていた趣味や仕事、家族や知人といった日常における人との関わり、それらを直接的又は物を通して間接的に感じられる事など、個室環境において今まで慣れ親しんだ生活との継続性に関する概念である。この概念は入居前の生活や家族に関わる過去の記憶に基づく発話で構成されることが多いため、認知症高齢者にとって過去の出来事や人との繋がりが、アイデンティティの維持にも寄与しているものと考えられる。とくに自宅生活から継続的に使用している家具や入居前からの趣味活動を表す物などが含まれる〔Ⅱ-1〕は、【Ⅰ】と【Ⅱ】に重複する関係にあることからその様子が伺える。具体的には、かつて仕事をしていた当時を思い起こさせるジャケットを洋服掛けに飾っている事や、亡くなった家族との思い出の写真のみならず入居前に飼っていたペットに類似した置物を設えている事などが挙げられる。

【Ⅲ. 人や物との繋がり】：施設に入居してからの他の入居者や職員との関わり、入居前からの継続的かつ直接的な家族や知人との交流、もしくは物を介した間接的な繋がりなど、個室環境を広義に捉えた場合の社会的な人や物との繋がりに関する概念である。これは認知症高齢者が他者と繋がりがあることによる安心感や、他者に対するいたわりの気持ち、他者からの働きかけに対する感謝の気持ちに関係しているものと考えられる。5つのカテゴリから構成されており、〔Ⅲ-2〕は訪問者が家族や知人であるか否かにより〔Ⅱ-2〕〔Ⅲ-1〕と重複の関係になりうるが、個室に訪問してきた家族や他の入居者との直接的な交流活動が生じていることを示している。また

【Ⅰ】は個室環境において「個人的」なこだわりが意識されているのに対して、【Ⅲ】は第三者との関わりを含む「社会的」な意識が働いていることから対極の関係にあると捉えられる。具体的には、早朝テレビを観る際に他の入居者を思いやり音量を下げている事や、訪問してきた家族と個室で会話などの交流をしている事、さらに少数ではあるが他の入居者を個室に招いている事などが挙げられる。

【Ⅳ. 職員による生活支援】：職員との良好な関係や、安全・体調

管理などの支援、家具や飾り付けといった職員からの働きかけによる物的な支援など、個室環境における職員との関わりを通じた支援に関する概念である。これは認知症高齢者にとって支援がある事により得られる安心感や住み心地の良さ、支援への感謝の気持ちなどが関係しているものと考えられる。3つのカテゴリから構成されており、[IV-1]は【III】との重複の関係にあり、職員との良好な繋がりが生活支援にも寄与しているものと考えられる。具体的には、夜中に起きて個室を出ようとするを見守っている職員がすぐに来てくれる事や、入居者の要望に応じて貸し出されたタンスやテレビがある事で不自由なく生活ができる事などが挙げられる。

【V. 自律しうる日常生活】：日課などの時間に基づく生活管理ができていいる事や、体調や安全から見た健康面に関する自己管理、衣服や小物の収納といった物に関する自己管理ができる事など、個室環境における自律しうる日常生活に関する概念である。これは自身の意志が尊重された日常生活の自律が促されているかといった事や

自尊心などが関係しているものと考えられる。3つのカテゴリから構成されており、具体的には、安全のため仏壇の線香に自身ではあえて火を灯さないようにしている事や、自律した生活を行うため普段着る洋服はすぐ手に取れるようベッドに掛けていているといった整理の仕方を工夫している事などが挙げられる。

【VI. 住空間としての快適性】：空間の明るさや清潔感などに基づく快適性や、それを維持するための設備・備品による調整、静かさや心地良さを踏まえた空間の落ち着きなど、個室環境における住まいとしての快適性に関する概念である。これは認知症高齢者が個室で暮らし上で心地よいと感じる空間であることや、個室自体が清潔に保たれているといった清潔感なども関係しているものと考えられる。3つのカテゴリから構成されており、具体的には、ベランダの存在により朝夕の採光が調整され心地よさを感じる事や、清潔感を維持するためタンスの上にのみ物を置いている事などが挙げられる。

【VII. 安定した個の居場所】：個室がリビングなどの共用空間とは

図1 認知症高齢者のその人らしさに基づく施設個室環境の概念モデル

＜凡例＞ 持込みの物品 持込みの物品以外（備え付けられている物品 又は 交換・貸出が可能な物品） 発話に見られる特徴

発話された物品率＝「個室内の物品」に占める「発話された物品」の割合

図 3 住処としての認識の差異と発話された物品との関係性

そして、これらを踏まえて、交流を目的とした個室外への移動や生活の継続、自律といった捉え方に広げていくことが、個室環境の領域性を高めていくことへ繋がるものと考えられる^{注7)}。

3-3. 住処としての認識の差異と個室環境の設え方

図3は住処としての認識の差異と発話された物品との関係性を示す。ヒアリング調査により得られた発話の中から「物品」に関わる内容を抽出し、住処としての認識の差異に応じて個室環境の設え方を検討する。そこで個室の物品に占める発話された物品の割合を「発話された物品率」として見た場合、【終住G】のほうが【仮住G】よりも高いことが明らかとなった。サイズや個数に着目すると、単数ではあるものの木製タンスや飾り棚、仏壇といった比較的大きな物に焦点が当てられているがわかる。また複数のものはサイズが小さく、折り紙や塗り絵、造花などの自身で作成した作品などが挙げられている。また、【終住G】のほうが【仮住G】よりも個室環境に後から持込まれている物品に焦点が当てられており、【仮住G】で取り上げられている場合には風景画や雑誌、書籍といった簡易に持ち帰ることの出来る物品が挙げられている点に特徴が見られる。

さらに、【終住G】において持ち込まれている物品は、兄弟姉妹や配偶者との関わりが深い思い出の写真や、自宅のような住み心地を感じさせる思い入れのあるタンスなどが挙げられている。【仮住G】では備品について焦点が当てられているものの、愛着やなじみのある物品として説明されるのではなく、他の物を説明する際に発話の中で補足的に用いられている。その場合、家に帰ることを前提とした内容や、何もすることがないのでしかたなく行動している内容などを説明する発話の中で用いられることが多く、個室環境を入居者自身の個の居場所として認識していない様子が伺える。

従って、【終住G】のような場合には、折り紙や塗り絵などの自身で作成した作品などを展示しつつ、物品や衣類の自己管理が可能な木製タンスや飾り棚といった家具などを持込むことにより、自宅のような安定した居場所としての認識を高め、自律しうる日常生活を促すことが重要である。【仮住G】のような場合には、現状において施設に入所することが一時的な利用として想定されているため、急激になじみの家具や愛着のある物を持ち込むのではなく、趣味嗜好に合わせた活動を支援しつつ、個室環境を安定した個の居場所として認識させ、他の入居者や職員との良好な関係づくりを支援していくことが重要である。

4. まとめ

- 1) パーソンフッドの視点から捉えられる認知症高齢者のその人らしい施設個室環境の概念は【Ⅰ. 個人的なこだわり】【Ⅱ. 生活の継続性】【Ⅲ. 人や物との繋がり】【Ⅳ. 職員による生活支援】【Ⅴ. 自律しうる日常生活】【Ⅵ. 住空間としての快適性】【Ⅶ. 安定した個の居場所】【Ⅷ. 個室外の空間との連続性】により構成される。
- 2) その人らしい施設個室環境の概念や設え方に与える要因は、住処としての認識の差異に応じて、以下のように示される。
 - ①とくに【Ⅰ. 個人的なこだわり】【Ⅱ. 生活の継続性】【Ⅲ. 人や物との繋がり】といった概念は、従来のパーソナリゼーションの意味を内包していることから、終の住処として認識している認知症高齢者にとっては、これを維持しつつ【Ⅷ. 個室外の空間との連続性】や【Ⅴ. 自律しうる日常生活】といった捉え方

へと広げていくことが、個室環境の領域性を高めていく要因となりうる。

- ②仮の住処として認識している認知症高齢者にとっても、パーソナリゼーションに関する整備は重要であるが、そのためになじみの家具や愛着のある物などを急激に持ち込むことは、彼らに自宅へ帰ることが出来ないといった不安を与える要因になりかねない。そのため、アイデンティティを維持しやすい家族の写真や、持ち帰りが容易な物などの設えにより、徐々に領域性を高めていくことが、緩やかに終の住処としての認識を強化させていく上で重要である。

謝辞

本研究を遂行するにあたり、ご協力いただきました入所者の皆様に改めてお礼申し上げます。また、調査対象とさせていただきました施設の施設長をはじめスタッフの方々には、格別のご配慮を賜りました。ここに、謹んで感謝の意を表します。

注

- 注 1) 文献 1 では、物理的環境がもたらす治療効果の可能性や認知症の人々とその介護者のための、より支援的な環境と質の高い生活の創造の必要性が述べられており、すべての治療環境は家庭が本来もつ属性を、できるかぎり可能な範囲で「しっかりとちつづける(hold on)」べきであること、すなわち生活の継続性が重要であることが示唆されている。
- 注 2) 文献 6 より、パーソン・センタード・ケアの理念の提唱者であるキットウッドは、パーソンフッドを核としてそれを維持し、認知症の人々の生活の質を高めていくケアの在り方を示唆している。
- 注 3) 認知症の程度は『「認知症高齢者の日常生活自立度判定基準」の活用について』(平成 18 年 4 月 3 日老健第 135 号厚生省老人保健福祉局長通知の別添)による。以下に基準の内訳を示す。Ⅰ: 何らかの認知症を有するが日常生活は家庭内及び社会的にはほぼ自立している。Ⅱ: 日常生活に支障を来すような症状・行動や意思疎通の困難さが多少見られても誰かが注意していれば自立できる。Ⅱa: 家庭外で前述Ⅱの状態が見られる。Ⅱb: 家庭内でも前述Ⅱの状態が見られる。Ⅲ: 日常生活に支障を来すような症状・行動や意思疎通の困難さがときどき見られ介護を必要とする。Ⅲa: 日中を中心として前述Ⅲの状態が見られる。Ⅲb: 夜間を中心として前述Ⅲの状態が見られる。Ⅳ: 日常生活に支障を来すような症状・行動や意思疎通の困難さが頻繁に見られ常に介護を必要とする。M: 著しい精神症状や問題行為あるいは重篤な身体疾患が見られ専門医療を必要とする。また、日常生活自立度は「障害高齢者の日常生活自立度」(平成 3 年 11 月 18 日 老健第 102-2 号 厚生省大臣官房老人保健福祉部長通知)による。以下に基準の内訳を示す。J: 何らかの障害等を有するが日常生活はほぼ自立しており独力で外出する。J1: 交通機関等を利用して外出する。J2: 隣近所へなら外出する。A: 屋内での生活は概ね自立しているが介助なしには外出しない。A1: 介助により外出し日中はほとんどベッドから離れて生活する。A2: 外出の頻度が少なく日中も寝たり起きたりの生活をしている。B: 屋内での生活は何らかの介助を要し日中もベッド上での生活が主体であるが座位を保つ。B1: 車椅子に移乗し食事・排泄はベッドから離れて行う。B2: 介助により車椅子に移乗する。C: 1 日中ベッド上で過ごし排泄・食事・着替において介助を要する。C1: 自力で寝返りをうつ。C2: 自力では寝返りもうたない。
- 注 4) ヒアリング調査は 21 名に対して行ったが、その内の 2 名は調査開始以後に不穏な状況が生じてしまいヒアリングを継続出来なかったことから、調査を途中で中止している。従って、その 2 名を調査対象から除外し、調査を完遂できた 19 名より得られた発話データを基に分析を行う。
- 注 5) 文献 13 より、理論的飽和化とは、データから新たに重要な概念が生成されなくなり、新たにデータを収集して確認すべき問題点がなくなったことを意味するとされている。
- 注 6) 47 概念はヒアリング調査により得られた 1030 個の発話数により生成され、最終的に構成される 8 コアカテゴリは重複を含むため 1468 個の発話数により構成されている。

注 7)文献 16 より、特養の入居者は、与えられた個室に入居後ただちに物を持ち込み
一気に自己の空間として領域化するのではなく、生活の中で少しずつ物を持ち
込むことで環境に働きかけながら時間を掛けて領域化していく傾向が示されて
おり、本研究の調査結果と概ねの傾向が一致していることを確認している。

参考文献

- 1) ユリエル・コーヘン、ジェラルド・D・ワイズマン、岡田威海(監訳)、浜田裕子(訳):
老人性痴呆症のための環境デザイン、症状緩和と介護をたすける生活空間づ
くりの指針と手法、彰国社、1995
- 2) Judd S, Marshall M, Phippen P. *Design for Dementia*. London: Hawker
Publications; 1998.
- 3) 赤木徹也: 家庭らしさを感じさせる居住環境のしつらい、一建築学・住居学の観
点からみた「家庭的」一、特集「家庭らしさ」とはなにか、老年社会科学, 第 30 巻,
第 4 号, pp.509-515, 2009.1
- 4) 辻泰代, 渡辺裕美: その人らしさを継続するための認知症高齢者グループホー
ム入居支援、入居前アセスメントと入居時ケアに焦点をあてて、介護福祉学,
第 18 巻, 第 1 号, pp.48-56, 2011.4
- 5) Sloane PD, Mitchell CM, Weisman G, et al. : The Therapeutic Environment
Screening Survey for Nursing Home (TESS-NH); An Observational Instrument
for Assessing the Physical Environment of Institutional settings for Persons
With Dementia, The Journals of Gerontology Series B: Psychological Sciences
and Social Sciences 57, pp.69-78, 2002
- 6) トム・キットウッド、高橋誠一(訳): 認知症のパーソン・センタード・ケア、新しいケ
アの文化へ、筒井書房、2005
- 7) 鈴木みずえ、水野裕、坂本凉子他: パーソン・センタード・ケアを目指した認知症
ケアマッピング(DCM)の発展的評価介入の有効性、スタッフと認知症高齢者に
及ぼす効果、日本認知症ケア学会誌, 第 10 巻, 第 3 号, pp.356-368, 2011.10
- 8) 木野美恵子: 生活時間を軸にした認知症介護の一考察、介護福祉学, 第 16 巻,
第 2 号, pp.229-237, 2009.10
- 9) 小木曾加奈子: 認知症高齢者の“よくない状態(ill-being)”の指標に基づいた分
析、生活全体に配慮が必要な認知症高齢者に着目をして、介護福祉学, 第 18
巻, 第 2 号, pp.155-161, 2011.10
- 10) 林悦子・小滝一正・林玉子: 個室空間の住まい方特性、一特別養護老人ホーム
の個室空間に関する研究一、日本建築学会計画系論文集, 第 517 号,
pp.131-138, 1999.3
- 11) 島末憲子・小嶋章吾: 高齢者ホームヘルプ実践における生活場面面接の研究
一M-GTA を用いた利用者の「持てる力を高める」プロセスの検討一、介護福祉
学, 第 12 巻, 第 1 号, pp.105-117, 2005.10
- 12) 堀恭子: 認知症デイサービスの職員は介護をどのように意識しているかー介護
職員の体験を探索的にモデル化する試みー、老年社会科学, 第 32 巻, 第 3 号,
pp.317-327, 2010.10
- 13) 木下康仁: グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践、弘文堂、2003
- 14) 赤木徹也・鯉坂誠之: 認知言語学的アプローチに基づく都市空間の概念化に
関する基礎的研究、日本建築学会計画系論文集, No.679, pp2043-2052,
2012.9
- 15) 赤木徹也・小林将夫・鯉坂誠之: 日常の家庭生活に内在する表象的幸福感に
関する概念モデルとその視覚的イメージの関係性、人間・環境学会誌 MERA
Journal, Vol.15, No.1, pp1-10, 2012.7
- 16) 橘弘志、外山義、高橋鷹志他: 個室型特別養護老人ホームにおける個室内の
個人的領域形成に関する研究、日本建築学会計画系論文集, No.500,
pp.133-138, 1997.10

(2013年7月9日原稿受理、2013年12月17日採用決定)